

おわりに

外国語科（英語）の学習指導要領では「実践的コミュニケーション能力の育成」が教科目標であり、評価では、「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」が、観点の一つになっている。伝統的な英文和訳、和文英訳、文法問題演習だけではなく、生徒と生徒との間での、また、生徒と教師との間でのコミュニケーション活動を通して、聞くこと、話すこと、読むこと、書くことを織りまぜながら指導することが求められている。覚えることを目的とした個人的なドリル学習に終始することなく、意味のある場面で意味のあるコミュニケーション活動を授業の中に取り入れることが、今後の英語指導の課題である。生徒の英語運用力、受験指導等の現実的な問題もあるが、各事例ともにコミュニケーション（自己表現）活動を工夫し、実践している事例である。**事例1**では、Slow Learners に対するコミュニケーション活動の例を示した。**事例2**と**事例3**は、受験を間近に控えた生徒に対するコミュニケーション活動の例である。各事例を参考にしつつ、各学校の実態に応じて工夫していただきたい。

1 「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」を育む指導の工夫

3つの事例では、各学年の1年後の到達目標、あるいは、各活動ごとの到達目標を明確に示し、楽しい、単純な活動から複雑な活動へと段階的な指導を実践した。特に初期の段階では、表現の正確さを生徒に求めず、「友人に伝えたい」という気持ちや「友人に伝わった」という達成感を重視する指導が、生徒の苦手意識を取り除き、生徒の英語への関心・意欲を形成することにつながった。また、生徒は、友人の作品を読んだり聞いたりして、「私にもできる」といった自信や意欲をもち始めた。生徒同士が相互に学ぶためにも、グループ活動やペア活動、生徒相互の評価を計画的に取り入れることが、今後より一層、求められる。グループ活動やペア活動をするには、生徒同士の信頼関係や生徒と教師間の信頼関係、さらに英語を使うことへの積極性が不可欠であるが、一方で、グループ活動やペア活動こそ、そういった信頼関係や英語を使うことへの積極性を築くために必要不可欠なものと言える。今後、より一層グループ活動やペア活動を授業の中に取り入れていただきたい。

2 「聞くこと」「話すこと」「読むこと」と関連付けて「書くこと」を指導する効果

事例1や**事例2**では、書く前に、聞いたり話したり読んだりすることで、相手を意識した表現活動が可能になり、書くことの目的や書く内容が明確になり、徐々に書く分量が増えてきた。特に**事例1**の「ドラマ作成」や、**事例2**の「リーディング活動と結びつけたライティング活動」では、口頭による自己表現活動を繰り返すうちに、文章での表現にも自信をもちはじめ、逆に、文章での表現を重ねるうちに、口頭による表現活動にも積極的になるなど、話すことと書くことが相互に関連していた。また、書くことは、文の構造に対する意識を芽生えさせ、書くときはもとより話すときにも正確に表現しようとする意欲につながった。4技能を織りまぜたコミュニケーション活動は、学習意欲を喚起させることが分かったが、この活動には、学習した知識を定着させる効果があることも、今後検証したい。

3 生徒の実態に応じた段階的な活動の設定と診断的な評価の工夫

生徒の実態を捉えて、校内行事や進路指導、他教科の学習内容等と連携させて、段階的に無理のない活動を提示することが重要である。そのためにも、日頃の観察や年度当初のアンケート、診断テスト、インフォーマル・インタビュー等を通して生徒理解に努めることが大切である。**事例1**、**事例2**では、事前アンケートを行い、生徒がどこでつまづいているのか、何に興味をもっているのかを調べ

た。また、**事例2**では到達目標を立てるために、事前に診断テストを行い、無理のない目標を設定した。**事例1**では、校内行事に関連付けて修学旅行先の地図を使い、生徒の興味を引く工夫をした。到達目標を明確に生徒に示すためにも、生徒理解に基づいた生徒と教師間の信頼関係を築くためにも、診断的な評価を年度当初に行うことが重要である。

4 形成的評価の工夫

3つの事例では、生徒の書いた文章の誤りを教師がすべて添削するのではなく、教師のコメントや生徒相互の発表を通して、生徒に誤りを気付かせ推敲させる機会を設定した。特に、**事例1**や**事例3**では、コメントを参考に書き直させることによって、正確に書こうとする意欲が生徒に表れてきた。生徒自らの「気づき」を大切にし、コメントを書く際には、生徒の学習意欲を高めるようなヒントやアドバイスを工夫することが重要である。

5 「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」の育成と「書く力」の向上との関連付け

ライティング活動のねらいの中には、文構造の習得や文を正確に書く力の向上もある。3つの事例では、「自分の思いを自由に伝えさせること、及び、コミュニケーションが楽しいと思わせること」が学習のねらいであったが、このことと、「書く力」の向上とを同時に達成させること、つまり、語彙・文法を確かなものにさせることが今後の課題である。「just-in-time learning（必要になった時に、その場で学ぶ）」としての自己表現活動と、単語や表現を覚えたり、系統立てて文法を学習したりするドリル学習とのバランスをとることが必要である。

高等学校における教科指導の充実
外国語科（英語）

発 行 平成18年3月
栃木県総合教育センター 研究調査部
〒320-0002 栃木県宇都宮市瓦谷町1070
TEL 028-665-7204 FAX 028-665-7303